中学生までに読んでおきたい日本文学 1

悪人の物語

松田哲夫 編

あすなろ書房

宮沢賢治 みやざわけんじ

一八九六（明治二九）―一九三三（昭和八）　詩人、童話作家。岩手県花巻の質屋、古着商の長男として生まれ、先祖代々の熱心な仏教信仰のなかで育つ。少年時代から植物や鉱物の採集に熱中。盛岡高等農林学校在学中に短歌や詩の作品を発表した。日蓮宗に深く帰依し、一時、上京して布教活動に従事。故郷に戻り、農学校の教師になるとともに、旺盛に詩や童話を書き続ける。大正一三年、詩集「春と修羅」を自費出版、童話集「注文の多い料理店」を出版。生前刊行はこの二冊のみ。農学校退職後、青年たちを集め羅須地人協会を設立し、農民のための文化活動を始めるが病気により挫折。

四つのつめたい谷川が、カラコン山の氷河から出て、ごうごう白い泡をはいて、プハラの国にはいるのでした。四つの川はプハラの町で集って一つの大きなしずかな川になりました。その川はふだんは水もすきとおり、淵には雲や樹の影もうつるのでしたが、一ぺん洪水になると、幅十町もある楊の生えた広い河原が、恐ろしく咆える水で、いっぱいになってしまったのです。けれども水が退きますと、もとのきれいな、白い河原があらわれました。その河原のところどころには、蘆やがまなどの岸に生えた、ほそ長い沼のようなものがありました。

それは昔の川の流れたあとで、洪水のたびにいくらか形も変るのでしたが、すっかり無くなるということもありませんでした。その中には魚がたくさんおりました。殊にどじょうとなまずがたくさんおりました。けれどもプハラのひとたちは、どじょうやなまずは、みんなばかにして食べませんでしたから、それはいよ

＊町―一町は約一〇九メートル。

小泉八雲 こいずみやくも

一八五〇（嘉永三年）―一九〇四（明治三七）新聞記者、紀行文作家、随筆家、小説家、日本研究家。本名ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn）。ギリシャのレウカディア生まれ。父はアイルランド人、母はギリシャ人。母親は精神を病み、六歳のとき両親が離婚。イギリス、フランスで学び、二十歳のときに、アメリカに渡り、新聞記者のかたわら文筆を始める。一八九〇（明治二三）年、来日して、旧制松江中学の英語教師になる。小泉節子と結婚し、日本に帰化して「八雲」と名乗る。「怪談」、「骨董」など、日本や中国の伝説や奇談に材をとった作品も多い。「停車場で」は「心」（明治二九年）の一編。

停車場で

明治二十六年六月七日

きのう、福岡からの電報で、同地でつかまった重罪犯人が、きょう、取り調べのために正午着の汽車で熊本へ送られてくるという知らせがあった。犯人を護送*するために、熊本の警官が一名、福岡へ派遣された。

今を去る四年前のことである。熊本は相撲町の某家に、ある夜ひとりの賊が押し入り、家人をおどして縛り上げたうえ、金目な家財をしこたま奪い取って逃走した。賊は、警察が巧みに張った非常線にまんまとひっかかり、二十四時間以内に――まだ贓品*をばらすひまもないうちに捕えられた。ところが、警察へひかれてゆく途中賊はやにわに手縄*を引きちぎると、捕吏*の所持していた刀を奪いとって、相手を刺し、そのまま逃亡してしまったのである。事件はそれなりけり*にな

*護送―牢屋に拘留されている被告人を、他の場所に移すこと。

*しこたま―どっさり。

*贓品―盗品。

*手縄―捕吏が人を捕えて縛る縄。

*捕吏―罪人を捕まえる役人。

*けり―決着。

解説「君は悪人を見たか？」

松田哲夫

人類がこの地球上で、集団で生活を送るようになってから、「悪」とのおつきあいは始まりました。善と悪とをどう区別すればいいのか、人々に被害を与える悪をどうしたら退治できるのか、いつの時代も人々は真剣に考えてきました。でも、この問題がすっきりと解決されることはなく、人類の目の前に置かれ続けてきたのです。

人類が考えたり楽しんだりするために生み出した文学にとっても、悪の問題は決して避けて通ることができない重要なテーマになりました。それと同時に、多くの書き手は、悪をとても魅力的なテーマだと考え、積極的に立ち向かってきました。こうして、多彩で楽しい悪人たちの物語が生まれてきたのです。

序詞「囈語」（山村暮鳥）は、文字の並び方が目に強烈な印象を与える詩です。上段には「窃盗」から「誘拐」までさまざまな犯罪行為（悪徳行為）を表す漢字二文字が並んでいます。下段には、うって変わって「金魚」から「かすてえら」まで、心和むような、滑らかな言葉が列記されています。これを、人生の裏表と読むことも可能ですし、悪と善は分けることが難しいくらいつながっているものだと読むこともできます。それにしても、見れば見るほど、心がざわつく詩ではありませんか。

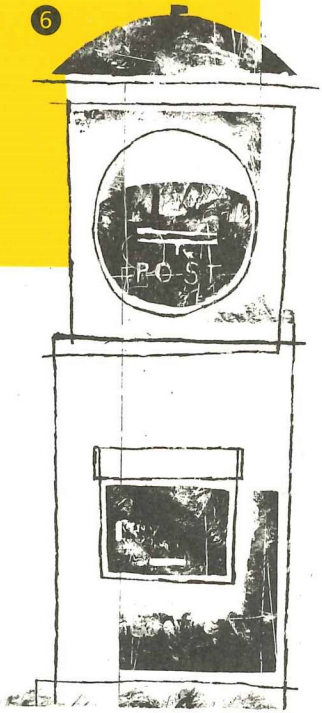
「昼日中」、「老賊譚」（森銑三）は泥坊たちの痛快な物語です。「昼日中」の鮮やかな盗みっぷりには、読者もまんまとだまされてしまい、その手際の良さについつい拍手喝采を送りたくなるかもしれません。一方、「老賊譚」は、思い上がった若い泥坊を懲らしめようと、「名うての大泥坊」が、鉄壁のアリバイを用意するというお話です。この老賊は、泥坊という、この世の正しい道からは外れたことをしていながら、その仕事についてのルールや美学をはっきりもっています。江戸時代には、どんな職業にも学び修業しなければならないことがあり、守るべき厳しい規則がありました。この話を読むと、そういう古き良き時代の、自分の仕事に対する心意気を大事にする男たちの姿が、目の前に浮かんでくるようです。

「鼠小僧次郎吉」（芥川龍之介）は、悪人を普通の人々がどういう風に見ているかを見事に描いた作品です。この話の中に出てくる、「胡麻の蠅」と呼ばれるけちなこそ泥は、同

中学生までに読んでおきたい日本文学 6

恋の物語

松田哲夫 編



あすなろ書房

江戸川乱歩 えどがわらんぽ

一八九四（明治二七）―一九六五（昭和四〇）　小説家。本名平井太郎。三重県名張生まれ。筆名はエドガー・アラン・ポーにちなむ。中学生のころから、黒岩涙香や英米のミステリーを愛読。早稲田大学卒業後は貿易商社員、造船所事務員、古本商、東京市役所吏員、屋台の支那そば屋など各種の職業を転々とする。大正一二年、「二銭銅貨」（「新青年」）でデビューし、「心理試験」、「D坂の殺人事件」、「屋根裏の散歩者」など独創的なトリックと斬新な着想による作品を発表。その後、通俗的スリラーや児童読み物で人気を得ていたが、戦争中は実質的に執筆禁止状態に。戦後は、ミステリーの普及、発展に尽力し「幻影城」を執筆。「人間椅子」は大正一四年、「苦楽」に発表。

佳子は、毎朝、夫の登庁*を見送ってしまうと、それはいつも十時を過ぎるのだが、やっと自分のからだになって、洋館のほうの、夫と共用の書斎へ、とじこもるのが例になっていた。そこで、彼女は今、K雑誌のこの夏の増大号にのせるための、長い創作にとりかかっているのだった。

美しい閨秀*作家としての彼女は、このごろでは、外務省書記官である夫君の影を薄く思わせるほども、有名になっていた。彼女のところへは、毎日のように未知の崇拝者たちからの手紙が、幾通となく送られてきた。

けさとても*、彼女は書斎の机の前に坐ると、仕事にとりかかる前に、まず、それらの未知の人々からの手紙に、目を通さねばならなかった。

それはいずれも、きまりきったように、つまらぬ文句のものばかりであったが、彼女は、女のやさしい心遣いから、どのような手紙であろうとも、自分にあてら

*登庁―役所に出勤すること。

*閨秀―学問や芸術で才能豊かな婦人。

*とても―の場合も。

太宰　治

だざいおさむ

一九〇九（明治四二）―一九四八（昭和二三）　小説家。本名津島修治。青森県北津軽郡金木村生まれ。県下有数の大地主の六男として生まれ、使用人まで含めて三十人以上という大家族に育つ。旧制弘前高校から東京帝国大学文学部仏文科に進学したが、左翼運動に傾倒して退学。自殺や情死を図ったりもした。小説家になるために井伏鱒二に師事し、戦中から戦後にかけて「富嶽百景」、「津軽」、「ヴィヨンの妻」、「斜陽」などの傑作を次々と発表した。人気も絶頂の昭和二三年、「桜桃」、「人間失格」を書き上げて、愛人と玉川上水で入水自殺をとげる。「カチカチ山」は昭和二〇年、書下し創作集「お伽草紙」（筑摩書房）収録の一編。

カチカチ山の物語における兎は少女、そうしてあの惨めな敗北を喫する狸は、その兎の少女を恋している醜男。これはもう疑いを容れぬ儼然たる事実のように私には思われる。これは甲州、富士五湖の一つの河口湖畔、いまの船津の裏山あたりで行われた事件であるという。甲州の人情は、荒っぽい。そのせいか、この物語も、他のお伽噺に較べて、いくぶん荒っぽく出来ている。だいいち、どうも、物語の発端からして酷だ。婆汁なんてのは、ひどい。お道化にも洒落にもなってやしない。狸も、つまらない悪戯をしたものである。縁の下に婆さんの骨が散らばっていたなんて段に到ると、まさに陰惨の極度であって、いわゆる児童読物としては、遺憾ながら発売禁止の憂目に遭わざるを得ないところであろう。現今発行せられているカチカチ山の絵本は、それゆえ、狸が婆さんに怪我をさせて逃げたなんて工合いに、賢明にごまかしているようである。それはまあ、発売禁止も

＊儼然たる―確固として動かしがたい。
＊甲州―旧国名のひとつ。現在の山梨県にあたる。
＊富士五湖―山梨県南東部、富士山北側のふもとにある、山中湖・河口湖・西（さい）湖・精進（しょうじ）湖・本栖（もとす）湖の五つの湖の総称。
＊船津―河口湖の南岸に位置する観光のさかんな地。
＊婆汁―「御伽草子（おとぎぞうし）」では、狸がおばあさんをだまして殺し、鍋にその肉を入れて煮込んだ「婆汁」を作り、帰宅したおじいさんに食べさせた。
＊道化―人を笑わせるようなこっけいなこと。
＊陰惨―陰湿でむごたらしいさま。
＊極度―物事の程度の限界。
＊遺憾―残念。
＊憂目―悲しい思い。

芥川龍之介 あくたがわりゅうのすけ

一八九二（明治二五）―一九二七（昭和二）　小説家。東京京橋入舟町生まれ。生後すぐに母フクが発狂し、母の実家芥川家に引き取られる。同家は代々江戸城の奥坊主を務めた家柄だったので、文芸や芸事などへの関心を早くからもつ。第一高等学校、東京帝国大学文科大学英文科に進学。同人誌に発表した「鼻」が師事していた夏目漱石から絶賛される。それ以後、王朝物、キリシタン物、開化物など多彩な素材を多様な文体で描いた傑作を次々に発表。晩年は、健康の衰えから、しだいに厭世的、懐疑的な方向に向かい、神経衰弱からくる幻覚に悩み、睡眠薬を多量服用して自殺した。「好色」は大正十年、「改造」に発表。

平中（へいちゅう）*という色ごのみ*にて、宮仕人（みやづかえびと）*はさらなり*、人の女（をんな）など忍（しの）びて見ぬはなかりけり。

――宇治拾遺物語（うじしゅうい）*

何（いか）でかこの人に不会（あわ）では止（や）まむと思い迷（まよ）ける程（ほど）に、平中病付（へいちゅうやみつき）にけり。然（しか）て悩（なやみ）*ける程（ほど）に死（しに）にけり。

――今昔物語（こんじゃく）*

色を好むというは、かようのふるまいなり。

――十訓抄（じっきんしょう）*

＊平中―平貞文。平安時代の歌人。「平中物語」の主人公で、「平中」の称で知られ、好色の美男子と伝えられる。

＊色ごのみ―恋愛の情趣を理解し、異性との交情にふけること。

＊宮仕人―宮中に奉公している人。

＊さらなり―いうまでもなく。

＊宇治拾遺物語―十五巻の説話集。これは巻三ノ十八の引用。芥川が好んで題材をもとめた古典のひとつ。

＊然て―それに加えて。

＊今昔物語―三一巻の説話集。これは巻三十ノ一の引用。芥川が好んで題材をもとめた古典のひとつ。

＊十訓抄―三巻の説話集。六波羅二藪左衛門（ろくはらじろうざえもん）入道の著と言われている。ここは第一ノ二九の引用。